

世界最大のオリエンテーリング大会「オーリンゲン」。素晴らしいのは規模だけではなかった。

2008年7月21-25日 スウェーデン  
オーリンゲン2008大会

## 世界最大の大会

この夏は家族でオーリンゲンに参加してきました。オーリンゲンはいわずと知れた世界最大の参加者を集めるスウェーデンの5日間大会です。今年は24,375人というオーリンゲン史上2位の記録に当たる参加がありました。

私自身がこの大会に最後に参加したのが1989年なので、実に19年ぶりということになります。90年代以降は遠征するにしても時間の制約や優先する大会があったので、世界一の規模を誇るオーリンゲンといえども参加する機会を失っていました。海外大会そのものも2004年を最後に出かけておらず、夫婦でうずうずしはじめたのが1年前。じゃあしばらくぶりに出かけようと検討をしたところ、娘の夏休みにも入り、またスウェーデンでも有数のテレインで開催されると噂に聞いたオーリンゲンに行くことになりました。

そこで気持ちが変わらないうちにと前年の10月末に申し込みを完了。オーリンゲンのエントリーは11月、3月、6月の3度の締切りがあります。早い締切りほど参加費が安くすむというメリットがあります。

## 子連れで参加

フライトはフィンエアを利用しました。日本とフィンランドを直接に9時間強で結んでおり、ヨーロッパへ入るには最短となっています。小さい子どもへの負担を考え、また自宅から最寄の中部国際空港の発着もある便利さでフィンエアを選びました。そして1歳の娘のバシュネットを確保するために、7月の料金が公表されて早々に予約を入れ、座席位置も確定しました。バシュネットは幼児用のベッドのことです。これを取り付けられるのは一番先頭の座席の壁の部分だけと決まっていますので、一便に取り付けられる数には限りがあるのです。



今年のオーリンゲンはスウェーデン西部のダーラナ地方のなかでもさらに西の端っこ、ノルウェーの国境に近いセーレンで開催されました。

セーレンはスウェーデンでも有数のスキーリゾートとして、またクロスカントリースキーマラソンのバーサロペットのスタート地点として有名なところ です。

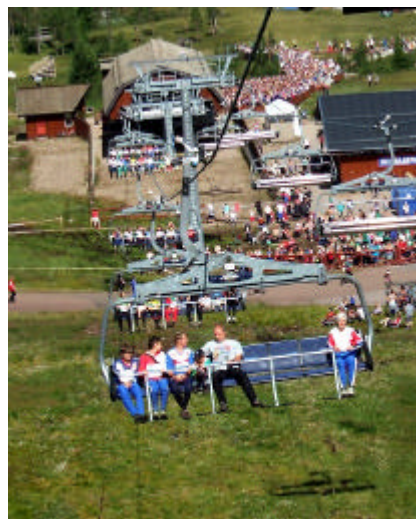
またダーラナ地方でのオーリンゲンといえば、日本のオリエンテーリング史を紐解くと意味深いのです。日本オリエンテーリング委員会(JOLC)が本場のオリエンテーリングを学ぼうと初めて視察団をオーリンゲンに派遣したのが、ダーラナ地方のレトビックで1973年に開催されたオーリンゲンなのです。当時の資料によれば、視察団の構成は、当時のJOLC事務局長を団長とし以下27名の他、専属カメラマンほか3名となっています。大変な力の入れようだったことが伺われます。それが日本のオリエンテーリングの発展の根拠であったことだと思います。

## 感激！素晴らしいテレイン

スウェーデンの典型的なテレインは、小径が少なく比高の比較的小さな丘陵地に森と湿地が広がっているというタイプです。オリエンテーリングにあたっては正確な地図読みとコンパスワークが必要となります。このようなタイプのテレインが1日目、2日目、5日目でした。

日本でのオリエンテーリングと比べればこれだけでも十分に楽しめるのですが、今年は3日目と4日目にスウェーデンでもとっておきのテレインが用意されていました。3日目はスキー場とその周りの森がテレインとなっており、コースの大部分を占める森はどこまでも見渡せるくらい走行可能度が良好で

した。4日目はスキー場の最高部で森林限界を越した原っぱのテレインでした。スタートまではスキー場のリフトで移動です。リフトに乗っている時間は10分ほどなのですが、乗るまでに1時間近くかかる時間帯もあり、スタートに遅れた参加者もかなりいた模様。8人乗りと6人乗りの二台の高速リフトを動かしてすら、それだけかかるということもオーリンゲンの規模を物語っているといえます。



## 参加者の間口も広いぞ

いうまでもなくクラスはキッズ0からH90まで細かく分かれており、まさに「老若男女を問わず」を実感します。また参加者任意の時間にスタートできるクラスや、オリエンティアでないスポーツマン向けのクラスなどから、間口の広さを感じました。またアドベンチャーレースを併設しているところからも、オーガナイザーの意気込みを感じます。だからこそ多くの参加者を世界中から集めるのでしょう。



2万人の参加者を集めるオーリンゲンですので様々なサービスがあります。会場ではスポーツショップや飲食の売店がでたり、入退室管理にコンピュータを使った託児所がありました。また我が家のように小さい子どもを抱える家族のために、両親が交互に子どもの面倒を見られるよう、離れたスタート時間を設定する Family Draw というサービスがあります。我が家もこれを申し込みました。おかげで実に離れたスタート時間となり、確実に子どもの受け渡しができ、会場での滞在時間で子どもたちはキッズOを楽しんでいました。

## キッズOに1300人

キッズOといえば、オーリンゲンではそれが3段階でステップアップができていくシステムとなっていました。



まず最も導入段階はミニクナット (Miniknat) と呼ばれ、いわゆるストリングOです。目印を頼りに森の中を進んでいき、コントロールではちゃんとSIでパンチをします。しかしその地図はコントロールに表示されている絵が順番に並べてあるだけです。またコース上には、輪くぐり、平均台があったり、崖をロープでよじ登ったり、木々の間にロープを渡した迷路を通ってみたりと、子どもたちが森の中を飽きる

ことなく歩かせることに主眼が置かれているような感じでした。

驚くことに2日目のミニクナットではコース途中で給水所ならぬパンケーキのサービスがありました。地元クラブの子どもたちが森の中のコース途中でパンケーキを焼いてくれたのです。またもっと驚くことはある日のミニクナットの参加者が1,300人だったこと。驚きのあまり言葉が見つかりません。

キッズOの第二段階はインスコールニング (Inskolning) といい、普通のO-Mapを用い、コントロールが多く、簡単なコースを保護者がついて走ります。コース途中で道の分岐があれば、正しいほうに行くとスマイルマークがあり、間違っているほうに行くとその怒った顔のマークが表示されており、それで子どもに気づかせるという仕組みでした。



キッズOの第三段階は距離や難易度に応じて4つのコース、U1~U4が用意されており、一番簡単なのはインスコールニングとほとんど同じで、難しくなるほど道から外れることが多くなる

ようなコースです。これも保護者がついてまわることができます。インスコールニングでは成績が付きませんが、U1~U4では成績が表示されます。

娘がインスコールニングを走ったときに付いていったところ、現地の子もたちがとても速く森の中を走っていることに驚きました。地形の違いがあるとはいえ、小さいころからの森の中を速く走る習慣が日本とは大違いで、それも国際競争力の差の、原因のひとつなのかもしれないと思わずにはいれませんでした。

## 快適なスウェーデンの1週間

今年のオーリンゲンの特筆すべきことのひとつは宿舎の良さでした。1週間の滞りで宿泊費が一人約8,000円だったコテージは、キッチン、リビング、シャワー、サウナ、テレビもついており、本来オフシーズンのスキーリゾートならではの価格とその設備でした。

またオーガナイザーの配慮があり、イベントセンター直近で、全てにおいて便利な立地のコテージでした。オーリンゲン経験の豊富な方からは過去最高のお墨付きがでるほどで、同宿した日本からの参加者一同、快適な宿舎生活をすごすことができました。



来年はスウェーデン南部のスモーランド地方のエクショーで7月18日-24日の日程で開催されます。ここは1972年のオーリンゲンと全く同じ場所とのことです。そしてそれは日本人が初めて参加したオーリンゲンでもあります。

今年のオーリンゲンではとても楽しい1週間を過ごすことができ、ついまた来年と考えるほどです。これは悪い病気にかかったかもしれません。

(落合公也)